

総務産業委員会視察報告書

- 1 調査年月日 令和5年11月15日（水）～ 16日（木）
- 2 調査場所 新潟県 長岡市
新潟県 新潟市
- 3 実施者 委員長 山本 成
副委員長 内田 敏 憲
委員 尾川 直行 石原 和人 森本 洋子
藪内 靖 松本 仁
随 行 事務局（大西健夫 青木弘行）
- 4 調査事項 新潟県長岡市
・ 地域開発についての調査研究
・ 文化観光についての調査研究
新潟県新潟市
・ 農林水産業についての調査研究
・ 産業振興についての調査研究
- 5 調査の概要
- (1) 11月15日、長岡市において、観光事業課長から道の駅「ながおか花火館」について、また市民協働課長からアオーレ長岡の整備についての説明を受けた後、アオーレ長岡の施設見学を行った。
- (2) 11月16日、新潟市（秋葉区）において、産業振興課職員から里山未来創造事業についての説明を受けた後、秋葉公園の現地視察を行い、NPO法人アキハロハス理事長から活動内容等について説明を受けた。

1 長岡市の概要

長岡市は、日本一の大河・信濃川が市内中央にゆったりと流れ、守門岳から日本海まで市域が広がる東西42.6km、南北59.3km、面積891.05km²、人口約26万人のまちである。

過去、幾多の災禍に遭いながら長岡の人とまちは、長岡のまちづくりの指針や人材教育の理念となっている「米百俵」の精神で立ち上がり、シティホールプラザ「アオーレ長岡」や「子育ての駅」など全国に先駆ける人づくりやまちづくりを進めている。

2 調査事項

(1) 道の駅「ながおか花火館」について

① 概要について

観光コンテンツの枠を超え、長岡市民の「誇り」である長岡花火を核とした地

域資源の魅力発信、交流人口の増加に加え、道路利用者の利便性向上、防災機能の強化等を目的としている。また、長岡花火を体感できるドームシアターを中心とした長岡花火ミュージアム、フードコート、地場産品（土産物）売り場、防災倉庫等も備えている。

② 成果・効果と問題点・課題について

（成果・効果）

令和2年のオープン以来、来館者数は毎年100万人以上を達成しており、令和4年のお土産屋や飲食店などの売り上げは合計で5億円超となっている。

災害発生時の支援の拠点としても活用している（令和4年12月豪雪時）。

（問題点・課題）

長岡まつり、イベント開催時の駐車場が不足している。

観光拠点（ハブ）として市内観光施設等への誘導が必要である。

③ 今後の取組について

検討中であるが、観光案内機能の充実が望まれる。

(2) アオーレ長岡の整備について（現地視察）

① 中心市街地のまちづくりの概要について

長岡市民26万人の心の拠りどころであり、人が出会い、いきいきと活動する交流の拠点であり、複合施設としてJR長岡駅と直結した施設である。

アオーレの意味は、長岡の方言で「また会おう」という意味とのものであった。

まちに開けた「ナカドマ」を基本コンセプトとし、誰もが気軽に立ち寄り、活動できる空間を有しており、様々な機能が「ナカドマ」に面し、連携が容易な配置となっている。「ナカドマ」とは土間が真ん中にあるということ。

また、行政と市民の活動が、市松模様のように混ざり合うということから、「ナカドマ」以外の主な施設として、アリーナ、執務室（総合案内もあり）、ホール、議場（1階におくことで市民視線を確保）がある。

② 成果・効果と問題点・課題について

まちなかの空洞化の顕在化、大規模商業施設の閉店などで、中心市街地が衰退していたが、本庁舎を中心市街地に移転、また、市役所機能をあえて駅前に分散配置することで、まちなかの賑わいや回遊性を創出することができている。

③ 今後の取組について

市民発意の活動・イベントの増、普段使いの場として定着、賑わいの拡散で、ふらっと立ち寄る場としての仕掛けづくりや周辺との連携、回遊性を高めていきたい。また、「米百俵プレイスミライエ長岡」との連携で新しい価値を創造する拠点への進化を目指したいとのものであった。

3 むすび

長岡市民の誇りであり、また慰霊・復興・平和への祈りを込めた長岡花火を核とした地域資源の魅力発信や交流人口の増加等を図る観光拠点施設として整備された道の駅「ながおか花火館」は、訪問客の満足度が上がる工夫がされており、花火を中心としたまちづくりの取組により誘客増を図っていこうとする機運が醸成していた。

備前市においても道の駅を整備するに当たっては、地域の特色を活かした文化観光・産業振興を進めていく必要があると感じた。

また、アオーレ長岡は、細部にわたり市民のよりどころとなる施設であり、「市民が主演」そして「市民が成長させる」という理念のもと、ルールを作らない自由度の高い市民目線での運営を実現している。

現在、片上地区で新図書館の建設や旧アルファビゼンの改築が進められているが、市民協働のまちづくりを基盤とし、老若男女が行き交う市民が集いやすい空間を創出するなど、市役所周辺が活性化するような取組を進めていく必要があると感じた。

1 新潟市の概要

新潟市は、東西42.5km、南北37.9km、面積726.118km²で、平成17年に近隣13市町村との大合併により、古くから互いに支え合ってきた新潟湊のまちと田園が一体となり81万都市となった。さらに、平成19年4月には、本州日本海側初の政令指定都市に移行し、昨年4月に15周年を迎え、8つの行政区においてこれまでにない政令指定都市として、地域の特色を活かした個性あふれるまちづくりを進めている。また、秋葉区は、新潟市の中で南東に位置し、東西を阿賀野川、信濃川の二大河川に囲まれ、北には小阿賀野川、南には山間丘陵部を有した四季を通じて美しい表情を見せる緑豊かなまちである。（新潟市HP参照）

2 調査事項

(1) 里山未来創造事業について（秋葉区現地視察）

① 事業内容について

秋葉区の特色としてまちから身近なところに里山があるため、気軽に登山や散策ができ、多様な施設が利用でき、自然に触れられるなど多様なことが可能となっている。また、里山活動団体等が多様な取り組みを実施している。

② 事業の効果について

里山活動団体等の応援や、「秋葉区里山文化未来への種」については、団体と団体の交流、市民が中心となり商工会議所や青年会議所も応援していることから

皆で盛り上げていこうという姿勢が出ている。

③ 今後の取組と課題について

区・市民の中には誇れる里山文化に気付いていない人も多く、若い人に知ってもらいたいために学校の活動として来てもらっている。

利用者増の向上と行政が負担し続けるか費用の問題があり、公園の見直しも必要となってくる。

3 むすび

秋葉区は、町から身近なところに里山があり、美しい里山の景観保全や再生を図るため、行政だけでなく20もの里山活動団体等や、行政と各種団体等が一堂に会しての「里山みらい会議」を開催し意見交換を行っているなど、多様な取組を実践し里山の賑わいを創出している。

本市においても他団体と連携しながら、地域の財産を再認識し、風土・伝統・文化という地域の宝を守ること、そして愛着と誇りを持てるような市民が主役の取組を行っていく必要があると感じた。

また、山林を多く有している本市においては、その活用と保全について専門家の意見を聞き、計画的に取り組んでいく必要があると感じた。